

発達の最近接領域における保育・教育方法について

富金原 光 秀

Child care based on the area of the development of teaching methods

Mitsuhide Fukinbara

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別冊

平成 28 年 12 月 20 日 発行

発達最近接領域における保育・教育方法について

Child care based on the area of the development of teaching methods

富金原 光 秀

Mitsuhide Fukinbara

はじめに

保育者養成施設では、子どもの発達過程を保育活動の出発点として道筋を描くことが、「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の示す理念に通じる学習の基本となる。

保育・教育活動における現場感覚を身につけるため必要となる基礎的知識や技能を机上で学ぶ学生にとって、「保育実習」は、実際の現場経験を通して保育の職業を深く学ぶ機会になるとともに、自身の新たな課題を見出していく場となる。同時に子どもや利用者と一緒に生活しながら、その発達について理解し、保育の内容について具体的に指導を受ける貴重な学びの経験ともなる。

「保育所保育指針」及び「幼稚園教育要領」では、一人ひとりの子どもの発達をうながしていくことが保育・教育の柱となっている。しかし、現状においては保育者のどのような意識や活動の違いが子どもの発達に影響を与えたのか否かなどについていまだに解明されているとはいえない状況である。

そのような問題意識の中で、筆者は、子どもが自らの身体で具体的に感じる感性を培う「遊び」に着目した教材研究の必要性を日々感じている。集団生活の中で身体を介した遊びを通じて葛藤や試行錯誤を経ながら思考力を養い、それらを表現する力を身につけ、その循環が繰り返されることによって、感覚や感性はより深度を増し、やがては創造力の源泉となるのではないかと考えている。

1. ヴィゴツキーの「発達最近接領域」について

日常や社会での生活実践の中から生成する身体を通した学びを実現するには、それを支援する保育者を始め、周囲の人々によって目標を共有しつつ、それを保育計画や環境構成に組み込みながら、各自が動機や意図をもって活動に参加することが欠かせない。また地域の資源を有効に活用したり、地域における社会的な環境と接合しながら、ひとやモノとの相互関係を通した活動においてこそ、社会性の発達や相互理解も進展が臨まれる。このような日常生活や社会性を前提とした学習方法のあり方を考察するため、I. Sヴィゴツキーを起源とした活動理論や状況論を取り挙げる。

ヴィゴツキーが提唱した「発達最近接領域」理論では、子どもが現状において、ひとりではでき

ない事柄（鉄棒や木登り等）に対して保育者が支援したり、また周囲の人や周りの環境を介すことによって、そのこと（鉄棒や木登り）ができるようになる。いわば人的・物的媒介物を積極的に活用しながら発達をうながしていく理論である。これによって、「自分ひとりのできる水準」と「他者からの支援や援助によってできる水準」との間の距離を示すものとなる。この「発達の最近接領域」について保育者が理解することで、現時点で子どもができる学習内容よりも、多少難しい課題や教材を与えて取り組ませていくことで、子どもが試行錯誤を重ねつつ、自己の能力や発達状態を更新し、次の新たなステップへと導くことができると考えられる。

このようにヴィゴツキーの「発達の最近接領域」は、人間の発達や学習がはじめから社会的な性格をもっていることを示唆している。「みんな」の中に属する「個」としての活動を通して、社会や生活における「知識」や「規範」がしぜんと身に付いていく。そして身についた知識や技能を新たな高次の学習活動に活かしていくことがヴィゴツキーの提唱する参加型の教育方法の大きな特徴であるといえる。

そこで本論では教育・学習の本質に「関係性」という柱を立て、その具体的教育方法の見直しについて事例を通じて検討したい。周囲との関係の中で自分をどう調整するかを学ぶ場の確保は保育所や幼稚園の重要な役割のひとつである。もっとも大人の社会においても人間関係の軋轢のなかで、自己本位の考え方を調整する必要性が日々要求される。その意味では、年長から年中、年少へと異年齢児による学習の機会を幼児教育の段階から積極的に保障することが肝要となる。

2. 「正統的周辺参加論」から保育方法を考察

正統的周辺参加の理論は、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」等の影響を受けてJ. レイヴとE. ウェンガーが展開した文化人類学の学習理論のひとつである。そこでは従来の学習構造を前提とせず、生産や職務への参加を通して実践的に行われる「場づくり」が求められる。その「場」への参加そのものが学習であるとして、まずはその周辺の一員（新参者）として、その場に参加し、中心的な人々（古参者）とともに、実践そのものにかかわっていく。この人間関係を軸とした実践による学習方法は、「状況に埋め込まれる学習」として活動成果や成功体験だけでなく、認知的葛藤や、失敗体験、情動的な意味づけも包摂した学びとなる。また、レイヴとウェンガーは、「文化的透明性」という概念をもちだし、その活動の中で中心となる古参者や実践共同体の他の成員たちにアクセスができなければ効果的な学習は得られないとしている。⁽¹⁾つまり保育実践現場での世代を越えた対話やコミュニケーションが学習を支え、また現場のメンバーや情報の透明性を高めておくことが人間関係を容易にし、学びを深める大切な要素となることを指摘している。

このことから学習者は、子どもの発達過程やヴィゴツキーが示す「発達の最近接領域」についてあらかじめ理解して保育現場に臨むことが、状況へのアクセスをよりスムーズにすると解釈することができる。また、これら「文化的透明性」は、保育実践における関係のネットワークの中で、お互いの

知識や技能に至る学習の程度の違いを相互に補完することになる。このことは職務における分業の垣根を越えた「関係」のつながりを可能にすると考えられる。社会を構成する「共同体」は、時として閉鎖的に作用する阻害要因ともなりうるので、「文化的透明性」によって関係が透明になっていく十分な道すじを踏まえた考察や検討が必須となる。

そこで上記で示した正統的周辺参加論にもとづきながら、保育活動における環境教育の試みと課題を提示し、その考察を試みる。

3. 異年齢児保育による学びのプロセス

園庭に限らず、広場や公園等の戸外には四季折々の季節の場面があり、色彩や形態を始め、自然の奥行きを感じたり、そこに咲いたり、散ったり、生まれたりするものは、子どもにとってさまざまな出会いの体験となる。子ども同士が交わりながら会話の中で言葉を交わし、そこで育まれる言語能力や思考は、社会的な産物として発達にかかわる。子どもたちは、自然や友達や道具（モノ）に対する興味を強く表し、周辺的な事物に対する関心を示すものである。また、人的・物的な環境の中で展開される木登りや、鉄棒での身の処し方や、道具の使用法などの技術の習得については、詳細に指導法が体系化されているわけではない為、困難に直面することになる。仮にノコギリの切り方を学ぶには、保育者が実際に切って見せるなどして丁寧に説明したり、年上の子どもが切っている姿を観察しては、模倣したりしながら異年齢児保育による経過を経て習得していくことになる。集団生活となる保育所や幼稚園の場において必須となる片付けや掃除に至る（の）作業についても新参者が雑巾がけをしながら、古参者となる年長の行動や授業内容を覗き見たりすることで、子どもの学びの発展や拡張にかかわり、日常生活における清掃としての「雑巾がけ」行為が、発達のプロセスや学習の状況に埋め込まれていくのである。

このようにテキストでは詳細に学習できない範囲については、正統的周辺参加の理論によって新参者が古参者の見よう見まねをすることで学習が進展する。こうした外言（外側）から学習のあり方を記述することが、とりわけ保育現場における教育方法に臨まれていると考える。

とはいえ、就学後の義務教育課程においては普通教育を目的としており、同年齢によるクラス編成が軸となり、上記で示した正統的周辺参加論との連続性を直接的に見出すことは現況においては難しい。そのような制度的諸条件を踏まえながら、今後、教育体系の中の方法論として考察・提示し、展開させていくべきであると筆者は考える。

4. エンゲストロームの「拡張による学習」

エンゲストロームは、ヴィゴツキーモデルから発展させた拡張的学習の理論と、アメリカのプラグマティスト「デューイ」等を理論の拠り所として、「道具」、「分業」、「ルール」を導入した発達の活動モデルを提唱している。エンゲストロームの「拡張による学習」では、活動における葛藤や矛盾を

集団の中で社会的に発展させることの意義と重要性を提示し、学びの主体は個人から活動集団へ拡張し、それにともない活動そのものが人間文化の質的な変化をもたらすとされる。⁽²⁾ここでの「拡張」とは、「物質的な実践を再構築する人々の集団がかかわる社会的・実践的な過程」であり、フッサールらによる「間主観性」の理論を拠り所にして、「関係」を閉じられた人間関係で捉えず、言語・行為・意味といった人間相互の間で構成されていく学習の場となることを主張している。⁽³⁾

さらにエンゲストロームの拡張の理論によれば、活動の質的な変換を習得するための3つの道具を人々に供給することの重要性を指摘している。ここでいう道具とは、物理的なモノに限定されず、意味や情報を含む概念を示している。第1の道具は反復的に使用する技術的手段として、第2の道具については第1で使用した道具を伝達することを学ぶ心理的な手段の段階である。そして第3の道具によって拡張的移行「活動を生成する活動」の為の方法やヴィジョンを習得できると述べる。⁽⁴⁾そもそもわれわれ人間の活動は、モノや道具を媒介することで可能になる。単に個人が学習を理解していくプロセスや、その変化だけを指し示したり、追いかけていくのではなく、道具とのかかわり、周囲の他者とのかかわりのなかで展開される実践活動を通して、その活動の意味を知ることが重視されている。これらを通じて、学習活動の本質は、「先行形態のなかに潜在している内的矛盾を露呈しているいくつかの行為から、客観的かつ文化—歴史的に社会的な新しい活動の構造（新しい道具など）を生産する。」ことであり、「いくつかの行為群から1つの新たな活動への拡張を習得する」ことによって「活動を生産する活動」が学習活動であるとエンゲストロームは述べる。⁽⁵⁾

以上ヴィゴツキーやエンゲストロームによる発達理論を保育現場における教育方法に当てはめ、事例にもとづきながら考察及び検証をしていく。

5. 幼児の事例を通して

■事例①「鉄棒を囲んで」

幼稚園内でRちゃん4歳（写真1：中央）が鉄棒で前回りに挑戦している様子である。左側にいる2人の子どもたちは、すでに前回りができる同期の子どもたちである。その中で1人できないRちゃん



写真1

は、自分自身の内に矛盾をかかえながら、何とか試行錯誤をしては、前回りを試みる。その瞬間に上手く行かずに転倒しそうになったRちゃんにSちゃんは突発的に手を差し述べた。幾度と転倒しかけたこともある為なのか、Rちゃんは適切な身の処し方で転んだことで、怪我などの大事には至らなかった。その後Sちゃんによって鉄棒の握り方などアドバイスを手助けが見られたものの、結局この時点でRちゃんは前回りを達成できず、次回の機会にお預

けとなった。後日、Rちゃんは保育者の支援と本人のやり遂げようとする意志によって、前回りができるようになり、現在では、より高次の発達プロセスとなる「逆上がり」に挑戦している段階となっている。

この事例から、集団活動での体験を通した自らの行為に対してインタラクションを起し、葛藤を内に抱えながらも、学びの幅や広がりをもって技能を体得しようとする姿が見られた。Rちゃんの認識や身体が「奥行き」をもって、点から線、線から面へと移行し、さらには高次の発達段階に進展させるベクトルへと変化していくものと考えられる。また幼児同士のかかわりあいの場の環境が適切に構成されていることによって、RちゃんとSちゃんは、偶発的に予期せぬ事態や出来事に遭遇したときの身の処し方や、動作によって見られる「最近接領域」による発達のプロセスや、「間主観性」の芽ともいえるような人間関係にかかわる要素がそれぞれの人格形成に働いていることが推測できる。「みんな」の中に属する主体は、人的・物的対象とかかわることによってしぜんと規範や分業を発生させている。エンゲストロームやレイブ・ウェンガーの述べるように、活動やそこから生まれる葛藤などが遊びの環境に埋め込まれるとき、活動の目的が見出され、発達段階や活動そのものが拡張していくと考えられる。

■事例②「木登りにおける場面」

写真2は広場においての木登りの場面である。A君3歳（写真：下）が木に登れずに葛藤している姿である。年上であるBちゃん（6歳：写真上）はすでに木登りに慣れている。木に登れば、登ったものにだけ与えられる達成感や、上から見下ろして鳥の眼となった気分の感覚で世界を見ることができる。こういった望みに対してどうしても登るきっかけを掴めずにいるA君に対して、筆者は話しかけ、足をかける箇所や立ち位置について説明や支援を行った。結局その日は登るまでには至らなかったが、登ることをあきらめたA君は木切れを使って何やら独自の遊びを展開しはじめた。具体的には、拾った木切れを木の枝に交差させ、それを使ってぶら下がるというものであった。もっとも木切れや枝は、多様な「意味」を備えた物的環境である。我々は木切れや枝を杖として使用することもあれば、地面に描くための筆の代わりとして利用したり、子どもにとっては剣に見立てて遊ぶなどさまざまな「奥行き」のある意味や情報を備えている。

それに加え、A君の手にもった枝に筆者が知覚したのは、木に絡ませ、鉄棒のように「ぶら下がる」という価値であった。その後A君は再び異なる木切れを拾い集め、そのうち1本を筆者に手渡した。枝という物的環境を他者に対して「贈与」したA君は、Bちゃんのもとへも同様に木切れを運んできた。このとき、A君にとって枝は、周辺との相互作用によって新たな意味となり、さらに贈与するという価値



写真2

を伴った。環境に潜在するモノの意味は、関係の中で変容し、新たな意味や経験をA君やその場の状況にいた我々に提供した。このように保育環境には、自己の認識の届かないいくつもの「奥行き」がある。事例の「枝」で見られるように、他者やモノとの関係によって、子ども自身が自ら体験している世界をその状況に直面した大人や保育者に指し示す。そのような保育の可能性は、日常のありふれた生活の中にこそ潜在しているものではないだろうか。それをつぶさに観察しながら、子どもの発達や学びがそれぞれ「関係性」の中で日々更新されていくこと、また道具の意味がひとやモノとの交渉によって新たにつくられていくことが確認できる。⁽⁶⁾

6. 事例からの考察

上記の2つの事例から、保育者は保育環境を既存の認識の枠組みの中で性急に解釈してしまうのではなく、自らにとって未知である環境の意味に対して、開かれた姿勢をもって臨む必要があるのではないだろうか。子どもの生活の質的環境を再構成していくためには、保育者自らが子どもにとって最良となる環境の理解を更新することが必要となる。相互関係をもちつつ「個人」も「みんな」も変化していく。その意味において人は生成的な社会的実践をたえず繰り返していく、ある程度の新参者といえるのではないだろうか。

また、子どもの発達を考える際に、すでに自分ができることや簡単な行為よりも、葛藤や不安は生じるが、少しだけやりがいや備えた、挑戦し甲斐のある経験ができた時の喜びはその後の発達に大きな発展をもたらすと考えられる。仮に失敗し、達成に至らずとも、遊び込むことを通じて得た知見は、次の活動の発達プロセスにおける思考力や判断力へとつながることが事例を通じて読み取れる。その為にも保育者は子どもの年齢による発達段階に加え、個々の発達過程を理解し、多少難しい課題を与えて取り組ませていくことで、発達を促進させていくと同時に、現時点でのこどもの生身の能力や発達状況が把握できるものとなる。

結び

遊びのなかで、ひとやモノとかかわりあい、何かを発見したりすることは、それ自体面白みを持ち、その内在的な魅力を記憶の蓄積に還元することにとどまらず、学習の形で表すことによって創造力や表現力は磨かれる。学習は保育環境によって時々刻々と変化する。そのような意味で、保育における現場は「状況に埋め込まれている」といい。

保育実習は実習生が保育現場という状況に参加し、さまざまな体験をすることを通して徐々に「保育者としての私」へと移行していくための機会であるととらえることができる。その中で生活の質を高める実践や社会性を踏まえた学びを起こすためには、できないこと、うまくいかないこと、失敗などに対して乗り越える葛藤の経験が必要となり、これによって学習者に学ぶことの意味を提供することができる。

エンゲストロームは、さらに学習が進めば、自分の置かれている文脈やその目標そのものについて省察とその組み換えを起こしていくと述べる。学習者は提示された問題を解くのではなく、問題や課題そのものを自ら想像・創造し、学びを深め、解決方法に対して思考しては表現していく。この段階に至ることで保育者は学びの主体となり、その保育実践は自らの動機に対して行う創造的な活動となると考えられる。学習自体がさまざまな色彩を帯び、立体性（奥行き）をもち、変容しながら、人格を備えていく。

ヴィゴツキーの系譜による「発達最近接領域」を理解し実践することは、一見雑多や雑踏ともいえる「みんな」が集う状況の中において「個」である自己が、社会で生きていく能力や、他の人と交わりながら生きていく能力を身につける教育方法となること。そして、「発達」とは、関係性の中においてひとやモノとかかわり、なじませていくことで育まれていく。ひとや道具とかかわり、徐々になじんでいく。行為に対して「できた」「できなかった」をくり返しながら、その範囲を徐々にひろげ、深めていく学びの実践である。そのためにも現場における保育者は「ひと」や「モノ」を必要とする「環境を通した学び」を適切に準備し、子どもの「育ち」を育んでいくことが保育現場に求められる。

引用文献

- (1) 伊藤崇他著 2004 「状況論的学習観における文化的透明性概念について」北海道大学大学院教育学研究科紀要 86頁
- (2) エンゲストロームY. 著 山住勝広他訳1999『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社79頁
- (3) 前掲書 山住勝広他訳 30頁
- (4) 佃繁著 2012 「ICT教育とエンゲストロームの拡張的学習」 プール学院大学研究紀要 第53号 163頁
- (5) エンゲストロームY. 著 山住勝広他訳1999『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社141頁
- (6) レイブJ.・ウェンガーE. 著 佐伯胖訳1993『状況に埋め込まれた学習』産業図書 7頁

参考文献

- 厚生労働省2008「保育所保育指針」フレーベル館
 文部科学省2008「幼稚園教育要領」フレーベル館
 ヴィゴツキーL. S. 著 柴田義松訳2001『思考と言語』新読書社
 ヴィゴツキーL. S. 著 柴田義松訳1970『精神発達の理論』明示図書
 デューイJ. 著 市村尚久訳2004『経験と教育』講談社

